

読書ノート

フェミニズムと生物学的性的差異

わたしがこのテーマに関心をもったのは、わたしがそもそも問題にしていた障害を生物学的差異としてとらえ、障害者差別の根拠をそこから合理化していこう流れがあり、それを批判してく作業に、この「性的差異」の問題とそれへの批判が援用できるのではないかという思いを抱いたからです。

おそらく、このあたりを最初に問題にしたのは、ミシェル・フーコーの『性の歴史』（新潮社）ではないかと思います。そもそもフーコーは生物学の成立はせいぜい18世紀の終わりからだとして、今、わたしたちの時代の多くのひとたちが生物学的事実は疑いもなくあるととらえる事自体を、彼がその著書を貫いて掲げてきた課題、歴史的相対主義で批判してみせています。

この性的差異の自明性に対する批判は、岩波書店から出された『日本のフェミニズム フェミニズム理論』で荻野美穂「身体史の射程—あるいは、何のために身体を語るのか—」でも問題にしています。また、フーコーの対象化からジェフリー・ウィクスが『セクシュアリティ』（河出書房新社）でかなり突っ込んで展開しています。このあたりのことはそもそも科学—哲学を貫いておきているパラダイム転換ということで、ポスト構造主義あたりの実体主義批判という脈絡で語られていることにもつながってきたことで、マルクスの影響をより濃く受けた流れでもこの実体主義批判という脈絡で出されてきています。デルフィの『何が女性の主要な敵なのか』（勁草書房）や世界システム論の流れの中でのフェミニズム世界システム論としてマリア・ミースが『国際分業と女性—進行する主婦化』（日本経済評論社）の中でも問題にしています。

このあたりの集約的作業として、ジュディス・バトラーの『ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱』（青土社）が出てきて、今かなりの注目を受けています。

そして、まだそのひとのまとまった論文は読んでいないのですが、『情況'00.4月号』でアンドレア・マイホーファーがインタビュー形式で話していることも、その流れの中にあるようです。バトラーの概念的なとらえ方に対してマイホーファー本人が歴史的なとらえかたとして対比しながら語っている内容は、かなり興味深く読めました。また、生物学的事実がないといっているのではなく、その生物学的事実といわれていることが象徴界のこととして現れているということや、生物学的事実が行動を規定するという図式を批判して、行動が生物学的事実を生み出すこともあるということを指摘するなど、因果論的なこと（本人がそのような押さえ方をしているかどうかは不明ですが）の批判をも突き出しています。いわゆる生物学的・医学的学の進行と性的差異の脱構築の弁証法的展開とも言えることが、そこでは進んでいるようです。どのような形で、そのあたりの理論的深化が進んで行くかマイホーファーの著作を読んでいくことも含めて注目して、かつ反差別で進んでいるパラダイム転換を、障害者運動の理論化の作業でも、その障害者運動理論の貧困的

情況を押さえ、批判しつつやっていく必要を感じています。

「自己責任」という差別と差別の受容―「乙武現象」を巡って

乙武洋匡『五体不満足』（講談社）

乙武洋匡さんの『五体不満足』という本がベストセラーになっています。しかも、並の売れ方ではなく超ベストセラーです。この本については、さまざまな形で話題になっていて、その脚光をあびる取り上げられ方から「乙武現象」という言い方さえされています。障害者の間でも色々なひとがこの本についてコメントしています。おおかたの内容は、一方で、評価することとしては、障害者が共に生きるという中で、差別を越える実践ということが彼によって示されているということ。もう一方で、批判としては彼は恵まれていて、彼の個別の問題を普遍化してしまうことは危険で、逆に障害者へ努力を強いること（差別）につながっていく、というふたつの指摘がされています。ふたつと書きましたが、評価はひとりのひとがどちらひとつの立場を選ぶということだけではなく、正負どちらもとりあげ、正負どちらを多く評価するかということでの論争が起きているようなのです。わたしも、差別という問題からこのことをもう少し掘り下げてとらえ返しておきたいと思います。

確かに障害者が健常者と共に生きる中で、共に生きる実践の中で、「障害の否定性」を越えた、色々な可能性が示されているということと言えます。乙武さんは、「障害とは何か？」という問いかけもして、それへの答えとして、わたしも共鳴しえる内容を示しています。また、共に生きるということで、これまでの分離教育主体の中での排除型の差別をこえていく実践のもつ意味ということが示されていて、乙武さんが実際それなりに共に生きえる道筋を、彼の生きて来た生の歴史の中で、示しているとも言えるのではないかとも思っています。しかし、問題なのは、負の側面として、彼自身が差別を差別としてとらえられない問題があります。

障害者への差別にはふたつの型があります。それを障害者への差別的な役割期待という形で示せば、ひとつは、「障害者は社会の迷惑にならないように、社会の片隅で生きよ！（そして時には死ね!）」ということで、もうひとつは、「努力して障害を克服しろ！愛される障害者になれ!」ということです。ここでいう、克服とは、障害の「生理学的」消滅もしくは軽減と障害にまけないで明るく前向きに生きるというふたつのことを含んでいます（ふたつものの生き方もしくはどちらかひとつを実践するということを含んでいます）。前者の役割期待とその押し付け、それを受けての障害者（被差別者）の役割遂行は排除型の差別とその受け入れとして最近とはとらえられるようになりました（以前はこれも差別としてとらえられませんでした。憲法の平等原則の中で、色々な差別事項を列記する中で、障害（者）の問題は書かれていません）。しかし、後者の差別（それをわたしは抑圧型の差別として指摘しているのですが、それ）に関しては、今でもそれを差別としてとらえられない傾向があります。乙武さんも、前者の排除型の差別に関しては、「運よく」という面も含

めて、それなりに実践的に越えて来たという内容をもっているのですが、後者の差別抑圧型の差別に関しては、むしろ差別者側の論理を受容し、加担さえしています。

後者の差別は、他の差別の問題では既に差別として指摘されてきています。

例えば、女性に対してもっとも抑圧的なのはエリート女性で、それは「あんたたちがそんな甘えたことを言っているからおんな総体が差別されるのよ」というせりふに示される言動として示されています。そして、現実には非対称的に既にあること自体が差別だという指摘をしつつ、その差別の構造をとらえないで、女性が個別的に努力することによって差別をくぐりぬけようとすること自体が、差別の構造を支え、自らが差別を容認していくことになるという指摘されてきています。そして、「頑張ろうなんて、やめよう」「個人的に努力するなんてことはやめよう」という提言がなされてきています。(運動は単線的には進みません。アフリカン・アメリカンのモスレム(イスラム教)の女性を排除した集会で、「自己責任」ということを突き出したということもあります。女性を排除するという差別性が、人種差別自体のとらえ返しの弱さということにつながり、差別ということを経験しながら、「自己責任」ということのもつ意味をとらえ返せない限界を生み出したのではないかと押さえています。)

さて、「乙武現象」といわれることは、以前にも「典子は、今」という映画の時にも同じ内容で展開されました。その時も、その映画を見たひとたちから、障害者に対して、「典子さんはあんなに頑張って、前向きに生きようとしているのだから、あなた(たち)も障害にまけないで、がんばりなさい」と言われるということが出てきました。今回の「乙武現象」の場合は、もっと事態は深刻です。典子さんの場合は、「手がないから足を使っているだけ」というような感じで、あまり努力ということが全面に出ず「自然体」でしたが、乙武さんの場合は、本人が「自己責任」ということを口に出しているからです。そもそも「自己」とは何か」という「哲学的」命題があります。最近「自己決定」という言葉がよく使われるようになりました。「自己決定」ということに対して、ある集会で「自己決定した」として子宮を摘出した障害者が他の障害者にも子宮摘出を勧めるということがあったという話が出ていました。子宮摘出ということの中には、障害者が子どもを産むことの否定ということを通した、自らの存在の否定と言う内容をもっているわけです。その価値観を障害者が自ら身につけたということは、一体どういうことなのでしょう？ 健常者社会から刷り込まれた価値観を身につけた時、それが自己決定と言えるのでしょうか？ 一体その時「自己」というのはどこにあるのでしょうか？

また「自殺」といわれることも同じ内容をもっています。わたしは「自殺」という表現は使いたくありません。なぜなら、自殺―他殺というのは対概念になっていて、「自殺は他殺でない」とされるのですが、自殺のほとんどは、自殺に追い込まれて自殺する、すなわち自殺ではなく他殺だという側面をもっています(だからわたしは「自死」という言葉を意識的に使っています)。そこにおける自己とはなんでしょう？ そもそも自死しようというひとを目のまえにして、「自己決定だから、その意志を尊重しよう」と、黙ってみている

なんてことがあるのでしょうか？ そのような「自己決定」―「自己」とはなんでしょう？

ひとは親を選んで産まれてくるわけにはいきませんし、自らの環境を選んで産まれてくるわけでもありません。環境によって色々な価値観や「能力」といわれることも違って来る時（どのような能力が問題になるかも違ってくるとき）、いったいどこまでが「自己」でどこからが「環境」の責任なのでしょう（このあたりのことは、「個人の責任」―「社会の責任」ということで、とりわけ「犯罪」―「犯罪者差別」の問題で語られてきました。そもそも「個人」―「社会」と二項対立的におくこと自体が問題なのですが、…） 今、障害規定において、「障害とは、社会が障害者といわれるひとたちに作った壁である」という規定がでてきています。障害を個人の問題としてとらえること自体に疑問がだされてきています。そのような時に「自己責任」などということがなぜ相変わらず疑問ももたれないで語られねばならないのでしょうか？

誤解のないように言っておきますが、「自己」などない「自己責任」などないと言っているわけではありません。「自己決定」ということがあいまいにせよ、だからと言って、「自己決定」をないがしろにしても良いとか、個人個人の意志をないがしろにしても良いとはいえません。ですが、根源的な問題としては、「自己責任」ということを「純粹に」問題にしえるのは、差別をなくしえたときです。もちろん過渡的にも、「自己責任」ということは問題にしていかなざるをえないことはあります。しかし、そこでは、先に差別の問題があるということを押さねばなりません。そのことを抜きにして、「他者」から「自己責任」ということを語るべきではないと思います（「自己責任」は自らの主体性というところで、自ら問題にすべきことであるにしても（そういう文脈で他者に提起することはあったとしても）、「他者」の責任をひとりひとりのおかれていた環境―状況（の違い）ということに抜きにして問題にするのはおかしいのです）。

乙武さんが「自己責任」ということを自らの内で語る場合には何の問題もないのですが、環境―状況ということ抜きにして、他者にまで一障害者総体にまで「自己責任」ということを語ってしまった時、その内容は障害者の抑圧（への加担）となってしまったのです。本の話にもどりますが、『五体不満足』という本がこれだけ売れたということは、一方で、障害者に否定的な価値観を反転してみせたという心地よさがあることもひとつの理由としてあり、そういう意味での評価ができる一方で、この障害者差別的な障害者の役割期待にぴったりマッチしたという側面があることを押さざるをえないと思います。そういう意味で、この本に対しても「ぞっとする」思いをもちつづけています。

さて、周りの反応として、この本の評価を巡っていろんな論争がおきているのですが、どうも過去の運動で語られていたことがちゃんととらえられないで、運動の風化ということの中で話がちゃんとかみ合わない状況が生まれているようです。新しい流れの障害者運動を生み出したと言える青い芝の運動の流れを押さえると、乙武さんはあのような本は書けなかったと思います。なぜならば、彼自身、色々な差別も受けているし（それを差別とはっきり対象化できていない、しようとしないうことから問題はおきているのですが）、反発

もしているのですが、それにちゃんと向き合おうとしていないのです。そこで、あの本を読んだ多くの（同情という形態で示す差別的）健常者は、頑張って障害を克服している克服しようとしている障害者として乙武さんを賛美します。彼の意図が何であれ、彼は愛される障害者を演じさせられてしまっているのです。それこそが青い芝が障害者におしつけられる健全者幻想に、それを怨念とも言えるような感情を抱いて反発し、「われわれは愛と正義を否定する」と告発し、そういう生き方を拒否したことなのです。生まれてきた時から障害者であったひとや、もの心のついた時から障害者であったものは、周りの差別的な障害者に対する役割期待の中で、その「愛される障害者」であることを期待され、健常者の価値観を刷り込まれ、やっとのことでそれに反発する中で、その価値観と対抗する自らの価値観を生み出そうとする中で、障害者運動の出発点にたちます。そのようなところで障害者運動に入った者からすれば、乙武さんの本があのような形で絶賛されることは身震いするほど恐ろしさを感じてしまうことであってしまふのです。

彼はテレビなどのマスコミに出ているのですが、少なくとも公の場では、時には差別的な対応に対してもにこやかな笑みをたたえてにこ対応しています。決して青い芝のように、差別を公の場では告発しないで、「愛される障害者」を無自覚的にでしようが、演技続けています。様々の反応の中で、乙武さんは障害者として自分を突き出していくことをやめる方向になってきているようなのですが、どこかで、青い芝や障害者運動に入って行った障害者がくぐった転換をなして欲しいと期待しているのですが・・・。

彼のどこか作ったような笑顔を見ていると自分のかつての、そしていままだひきずっている自分自身の作り笑いの顔と結びつけて身震いします。わたし自身やっと30も半ばになって、障害者として差別されるという意味での「障害者」から、障害者差別を告発する障害者（「」のつかない障害者）の出発点につきました。彼は、十分積極的でエネルギーをもっているし、そして、彼の内には、彼を見る差別的なまなざしへの反発—ふつふつとした怒りを潜在させていると感じています。彼が障害者として出発することを願わざるをえません。

わたしが彼に自分の価値観を押し付けるとはできませんし、そういうことはしようとも思いませんが、そもそもは、彼が自分の価値観をマスコミを通して、無自覚的にですが、他の障害者に押し付けたことから彼への批判が起きていることなので、ひとこと批判はしておかねばと文にしてしまいました。